

詠む広場

毎日俳壇

片山由美子 選

空の青がすかに残しうろこ雲

東京 渡邊 顯

△評▽うろこ雲が一面に広がって
も、空は確かに真っ白ではない。
青さが透けていることで、うろこ
雲はさらに美しく見える。

所在なく鳴いてみたるや屋の虫

西宮市 平田 あい

△評▽夜に鳴いてこそ秋の虫。
屋の虫はまさに所在なげで、虫に
なり代わってのひと言のよう。

月下美人さゆらぎひらきゆくしじま

和歌山市 中筋のぶ子

舳ひ舟大きく揺れて初風

相模原市 はやし 央

日本の闇美しき盆踊

いわき市 会沢 繁

日の匂ひ祖父母の匂ひ稲の花

鹿児島市 平川 玲子

海風の肌にまつはる残暑かな

神奈川 中島やさか

緑蔭や元酒蔵の美術館

出雲市 石原 清司

天辺に残る一花や立葵

青森市 小山内豊彦

三輪車更地に放置夏の果て

春日市 林田 久子

小川 軽舟 選

カッターの刃先折る音秋立ちぬ

平塚市 藤森 弘上

△評▽日常のかすかな音に季節の
到来を感じ取った。空気の澄む秋
は音に敏感になるようだ。パキッ
という音が静かに響く。

蚕豆や給与明細べら一枚

茅ヶ崎市 加藤 西葱

△評▽べらは紙っぱら。高給では
なさそうだが、給料日にゆでたソ
ラメで一杯やるのだ。

銀漢の雫一滴剱岳

岸和田市 妙中 正

影が地に沁み込んでゆく残暑かな

北名古屋市 月城 龍二

夜食とる働く背筋伸ばしつ

名古屋市中区 山内 基成

秋風や埠頭を歩く人もなし

神戸市 松元 一師

鈴虫を聞きて酒酌む屋台かな

龍ヶ崎市 小宮 光司

初風や無縁仏に雲の影

鳥取 馬野慎一郎

ガラス絵のひづむ聖母や白木樫

大阪市 福井 恬鈺

街路樹の陰踏んでゆく今朝の秋

備前市 中岡ながれ

西村 和子 選

人間はたかが百年銀河濃し

岸和田市 妙中 正

△評▽人生100年と言われるこ
の頃だが、宇宙の巡りから見ると
一瞬の光にすぎない。観念的なよ
うだが、季語に実感の重みあり。

乗り遅れベンチにひとり虫時雨

東大阪市 三村まさる

△評▽日照時間の変化に敏感な虫
たちは、いち早く秋を実感させて
くれる。俳句にあいにくはない。

棚経の椅子を喜ぶ僧侶かな

三重 瀬川 令子

ゆつくりと囁く新涼の水甘し

東京 福島 照子

蹠に砂のほてりや夏終る

奈良市 伊東 勝

上空をとんぼ群れとぶ日暮れかな

岡山市 久山 順子

遠花火アルバムめくる手を止めて

京都市 井上 秀

空缶のべこんとへこむ炎暑かな

東京 徳原 伸吉

熊蟬のひねもす揺らす裏の山

西海市 まえだいっそう

流灯の一時揺れて遠さかる

浜松市 久野 茂樹

井上 康明 選

夢をまた浮かべてゐたるアイスティー

東京 山野ゆかり

△評▽まだ諦めることのない夢を
アイスティーに託す。グラスの水
と茶色のアイスティーが夏の日に
揺れ、はかなく切ない。

粉吹きし蟬の腹撃つ蟻蟻蟻

小平市 中澤 清

△評▽セミの白くなった死骸に群
がる無数のアリ。よし登るアリの
上をさらに他のアリが歩く。

秋暑し解体跡の青シート

東京 永井 和子

シベリアに果てたる父よ終戦日

姫路市 板谷 繁

神無月山の向かうに山また山

富士宮市 渡邊 春生

霧の中カンテラを振る転轡夫

名古屋市 可知 豊親

原爆忌物干し竿の平行線

名古屋市 四條たんし

対局の父の窓越しオクラ咲く

甲府市 清水 輝子

新月の闇を好みしなめくじり

横浜市 菅沼 葉二

機械油の臭ふ作業着野分あと

前橋市 松本 潤

<歌集>

新刊

<句集>

◇伊藤伊那男『狐福(きつねふく)』 第4句集。狐福とは、「思いがけぬ幸福」の意であるといひ、2年前の大手術を経て小康を保っている76歳の著者の思いがこもる。△鈴虫の鳴き出す前の庭(ひげ) 振れり▽のような描写の緻密さが、多彩な作風の深まりを感じさせる。(銀漢俳句会 北辰舎・3300円)

◇遠藤容代『明日の靴(かばん)』 著者は1986年生まれ。俳句を始めて以降10年間の作品から321句を収める第1句集。俳句が著者を精神的に支えるようになるまでの日々が作品となっている。△大立家族全員濡(ぬ)れてをり▽など、実感の裏付けが説得力を持つ。(ふらんす堂・3080円)

◇板倉ケンタ『花一虫』 1999年生まれ。著者の第1句集。定型に収まり切れない思いをどう定型にしていくなか、若くして俳句と出合った著者の格闘の跡を見る。△水中花水の向うの人とある▽の視線はあざやか。(ふらんす堂・2750円) (俳人・片山由美子)

◇永田和宏『わすれ貝』 第16歌集。歌集題は2枚貝の離れ離れになった1片の意味。個人的社会的にも転機を迎え、そういう日々を詠む亡き妻河野裕子の歌が胸を打つ。△わすれがひわれを忘れて君はあよ雪虫われの逢(あ)ひにゆくまで▽ (青磁社・3080円)

◇林和清『塚本邦雄の百首』 戦後短歌を代表する塚本の歌を「試行錯誤の果てに苦しんで世に問うた作品」と著者は解説に記す。丁寧な作品の読みが魅力。△革命歌作詞家に凭(よ)りかかれてすこしづつ液化してゆくピアノ▽ (ふらんす堂・1870円)

◇瀬戸夏子『をためよ素晴らしき人生を得よ』 1949年に結成の女性だけの超結社「女人短歌会」。その歌誌に参加した長沢美津、北原志保子、川上小夜子たちの歌、そして同時代の河野愛子らの歌を「女性」の視点から論考する。△早春のレモンに深くナイフ立つるをためよ素晴らしき人生を得よ 葛原妙子▽ (柏書房・2090円) (歌人・中川佐和子)